



約80%の症例で強オピオイドが使用された。WHOラダーの使用、強オピオイドとNSAIDs・ステロイドとの併用はよく行われていたが、痛みの評価におけるスケールの使用、鎮痛補助薬の使用が少なかった。鎮静は食道癌症例13例、乳癌症例8例に行われ、全例が一時的鎮静であり、持続的な深い鎮静が多かった。食道癌症例では死亡時まで一日約1500mlの輸液が行われていた。乳癌症例では有意に少なかった。

【結語】疼痛の原因、薬剤の有効性を常に評価し、適切な薬剤を上手に組み合わせることが重要であると思われた。

## 18 無再発で長期生存が得られている AFP 産生胃肝様腺癌の3例

藍澤喜久雄・森岡 伸浩・奥村 直樹  
清水 英利・宮下 薫

燕労災病院外科

AFP産生胃肝様腺癌は、高率に肝転移を来す予後不良の高度悪性胃癌である。今回、無再発で長期生存が得られているAFP産生胃肝様腺癌の3例を報告する。

〔症例1〕54歳、男性。術前AFP値は4587ng/mlで、脾胃合併胃全摘術、横行結腸切除、D2郭清を行った。P0H0T4N1；進行度ⅢBであったが、術後約11年経過した現在、再発なく生存中である。

〔症例2〕58歳、女性。術前AFP値は920ng/mlで、幽門側胃切除術、D2郭清を行った。P0H0T2N1；進行度Ⅱ、術後9年経過し、再発なく生存中である。

〔症例3〕78歳、男性。術前AFP値は147ng/mlで、脾胃合併胃全摘術、D2郭清を行った。P0H0T3N0；進行度Ⅱで、2年5ヶ月経過した現在、無再発生存中である。3症例は胃肝様腺癌の像を示し、2例がリンパ節転移陽性、3例ともリンパ管・静脈侵襲陽性であったが、再発なく長期生存が得られている。

## 19 胸部下部食道癌に対する経裂孔的根治的食道切除術の治療成績

神田 達夫・中川 悟・鈴木 力\*  
池田 義之・中島 真人・矢島 和人  
本間 英之・清水 孝王・大橋 学  
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野  
新潟大学医学部保健学科\*

【目的】教室では、頸部・上縦隔郭清を省略した経裂孔的アプローチによる根治的食道切除術を1994年より胸部下部食道癌に対して行ってきた。本術式の治療成績を報告する。

【患者】2003年5月までに本術式が施行された下部食道癌患者41名。

【選択基準】術前診断で腫瘍の局在が下部食道に限局し、臨床的に縦隔リンパ節転移陰性と診断された症例。

【成績】40例において根治切除が行われた。手術時間と出血量の中央値は287分、508mlであった。術後呼吸器管理を要したものは5例(12%)のみであり、呼吸器合併症は2例(5%)と低率であった。在院死は認めていない。全41例の50%生存期間は4年10か月、他病死も含めた累積5年生存率は44%であり、開胸食道切除術と同等であった。

【結論】経裂孔的根治的食道切除術は、安全で周術期管理を容易にする。長期成績も開胸手術に劣らず胸部下部食道癌に対する標準手術になり得ると思われる。

## 特別講演

「EBMに基づいた臨床試験とメタアナリシス」

京都大学大学院医学研究科  
疫学研究情報管理学講座

教授 坂本純一